生きてはたらく言語能力を高める国語科学習
～目的を明確にもって自分の考えが伝わるように書く力～
三年生「書くこと領域」の実践

提案者　澤上　由枝（飛騨市立神岡小学校）

一　テーマ設定の理由

児童が書く力を身に付けていく中で、大切にしていきたいことは、児童が自分の書いたものに込めた思いを、より正確により豊かに読み手に伝えるということである。しかし、目的をもたないまま書き進めていたり、読み手を意識せず自分勝手に論を進めていたりする実態がみられる。そこで、目的を明確にもち、読み手に自分の考えが正確に伝わることを意識して、自身の書く力を高めていく児童の姿を目指した。

二　研究仮設

書いた作品を読む相手と、何のために書くのかという目的を明確にすることで、自分の伝えたい内容を豊かに思い描くことができ、自分の書いた内容が読み手に伝わるかを意識して、書いたものを何度も読み返し、より伝わるように書こうとすることができる。

三　研究内容

（一）書く目的を明確にし、効果的に言語能力を育成するための言語活動の設定

（二）①児童が単位時間の見通しをもつことができる導入の工夫

②対話を通して考え続けるための指導・援助の工夫

四　研究実践

単元名　書き表し方をくふうして、物語を書こう

「たから島のぼうけん」

（一）書く目的を明確にし、効果的に言語能力を育成するための言語活動の設定

本単元では、言語活動に「読み手をどきどきはらはらさせるぼうけん物語を作る」という活動を位置づけた。完成した物語の読み手は、隣のクラスの児童である。この単元で身に付けさせたい言語能力は、「自分の想像している場面を、読み手に正確に伝える力」である。読み手を「どきどきはらはらさせる」という目的を明確にすることによって、その場面の様子を豊かに思い描くことに必然が生まれた。

（二）①児童が単位時間の見通しをもつことができる導入の工夫

単位時間ごとに、導入で教師のモデル文を示し、本時に何ができたら良いのかを明確にした。また、B評価のまとめと、A評価のまとめを授業の初めに示し、本時にどんな学び方をすると良いのかを明確にした。

②対話を通して考え続けるための指導・援助の工夫

この単元では、常に読み手を意識しながら書くことを大切にして、学習を進めていった。そのため、書く活動と読み合う活動を授業の中で何度も行えるよう、意図的にペアを組んだ。読み合う活動に入る第三時には、対話モデルを動画で示し、どんな対話をすれば、「どきどきはらはらさせる」物語が書けるかを明確にした。

また、伝わるように書くには、語彙力を高める必要がある。そのため、毎単位時間の終末に、本の中から「どきどきはらはらする言葉」を集める活動を位置付け、児童が集めた言葉を教室に掲示した。また、一～三年生の教科書に載っている「言葉のたから箱」も掲示した。児童が掲示された言葉を見て、より伝わる表現を考え続けられるようにした。

五　成果と課題

○「読み手をどきどきはらはらさせるぼうけん物語を作る」という言語活動により、どの児童も目的を明確にして書き進めることができた。また、作品ができても満足せず、読み手により正確に伝わる言葉を考える姿が見られた。

○導入で、教師のモデル文やまとめを示すことによって、本時のゴールが明確になり、どの児童も見通しをもちながら、学びを進めることができた。

●対話活動で考え続けることができたペアとそうでないペアがあった。それぞれの児童にとって、書く力を高めるために有効な対話とは何か、また、より活発な対話となるような有効な言葉の示し方はあるか、今後研究を重ねていきたい。